正しい人であつたからでもあらうが、軀をこゞめて坐つて居るのであつたが、退屈すると、鬢の毛の一二本ほつれたのを、眼の先で弄り、それを見詰めながら、話をすることがあつた。けれども、話がハヅんで來ると、肩を搖すつて少し反り身になつて笑ふことなどもあつた。話は確に上手であつた。創作のなかに散見する冷嘲のやうな調子が口にのぼる時が殊に面白かつた。なまめかしいといふ感じを與へる婦人では無かつた。艶は無い、如何にもクスんだ所のある人であつた。娘と云ふよりは奥さんと云ひ度いやうな人であつた。當時の普通一般の女を離れて、男性の方に一歩變化しかけたやうに感ぜられる婦人であつた。舉作は如何にもしとやかであつた、言葉は如何にも上品であつた、何處にも女らしく無いと云ふ所は擧げ得られ無いに拘らず、何處と無く女離れが爲て居るやうに私には感ぜられた。多分は一葉君の氣魄の人を壓するやうな所があつたからであらう。要するに、共に語つて痛快な婦人の一人であつたらう。男が戀ふること無しに親しく交はり得られる婦人の一人だと私は思つて居た。

『日記』には一葉君のヒガミが散見する。けれども、私は、一葉君をさういふヒガミなどは少しも無い何處までも寛厚な婦人だと思つては居無かつたので、別にその點では、意外の感じはし無い。又、一葉君が男の友人の親しい感情を直ちに戀愛からと解した所に至つても、婦人としては一應道理に思はれるのだ。私どもは一葉君の女なることを忘れて居た傾がある。人たる一葉君を餘まりに重んじ過ぎたので、今日までも女としての一葉君を忘れて居たのだ。男に戀はるゝことの斷じて無いと自ら諦め得る若い婦人が何處にあらう。それほどに自己の天賦の權利を投げ捨て得るまでに人間離れのした婦人が何處にあらう。『日記』のなかのさういふ條下を見て、人は一葉君の自惚れと嘲笑ふかも知れぬ。しかし、さういふ『自惚れ』の無い人間が何處にあらう。男でも無からう。女では猶無い。並の人は默まつて居るから分から無いものゝ、あらゆる未婚の婦人に僞り無き告白を書かせたら、一葉君と同じやうなイリユージョンに陷つて居無いものは殆どあるまい。而して、さういふことの無い女があれば、それは性質からでは無くつて、境遇、機會の有無に歸するのみだ。

一葉君は美人では無かつたが、決して醜い器量の婦人では無かつた。先づ並々の容姿であつた。そんなに飛び離れた考の人では無かつた。さういふ並の婦人に女たることを捨てゝ諦らめて居よといふのは、言ふ者の方が無理の上無しであらう。

唯それのみでは無く、詩人、文學者などゝいふものは、或點に向つては鋭敏で無ければならぬので、元より白痴に近い愚人では駄目であるけれども、普通の人から見ると、存外に或他の點ではヌケて居ることがあるものである。思ひ過ごしもあらう、無邪氣な誤解もあらう。他人を觀察する力はあつても、其の觀察が適中する時もあれば存外に又外づれることもあるものだ。要するに、普通の人と少々異なつた所に詩人、文學者の生命がある。『日記』に表はれて居る一葉君の誤解とか、思ひ過ごしとかは、大抵普通の人にあり勝なものに過ぎぬと私は思ふのだが、萬一夫れ等のものが普通の場合に比して色合が濃いとか強いとかいふのなら、それは、一葉君の文學者たる資格から生じたことだと斷せざるを得無からう。

普通の人は、自分の心の奥を自ら探ぐるといふことは滅多に爲無いものだ。心をうち開くやうで打ち開き得無いことが多いものだ。自己の心の動靜を自ら窺ひ、之を記錄し置き得るものは、文學者の外には、餘り無い。文學者は少くとも其職業上あらゆる事を記錄し置く特權を有する。一葉君の『日記』は、人間の心の記錄として不朽の價値がある。少くとも、在來の日本の文學上に於ては、比類の少ない文書なのだ。

一葉君は、家人に向つては知らず、われ〳〵に向つては、決して他人を非難するやうな話を爲無かつた人だ。中島氏は元より中島氏門下の人々などに就ては惡意の無い唯の噂さへ、私などは一葉君から一切聞たことは無い。如何にも愼み深い人であつた。日記に彼のやうにさま〴〵なことを書いた人が、口では他人のことは唯の噂さへ漫りに爲無かつたといふのは、注意に値ひする事實では無いか。

彼の時に斯う云は無かつたらこそ宜けれ、彼の時に斯う爲無かつたらこそ宜けれとは私どもの屢思つて意を安んずることであるが、云はず、行はざりしが爲に僅に自己の面目を保ち得た經驗の少く無い私どもには、如何なる考でも夫れが他人の心の裡のもので有る限り夫れに對して第一の石を投ずる資格は無い。一葉君は、自己の人と爲りを卑まれ友人の憎みを負ふやうな危險に於て、『日記』を遺して逝いた。私どもは、『日記』を以て一葉君を非難する材料には使ひ度く無い。唯或時代に於ける或婦人の心の經過を可なり詳細に記した記錄として、人間的興味に饒な書類として『日記』を見度いのだ。

一葉君は負けぬ氣性の婦人であつた。落魄したと自ら思つて居た。侮られまい、欺

かれまいとは、他人に對する時の一葉君の態度であつた。『日記』は斯ういふ婦人の心中の記錄なのだ。『日記』は一葉君の境遇を勘定に入れて讀むべきものであらう。後篇に收めてある『棹のしづく』中の清少論は私どもには一葉君自ら辯じたものゝやうに思はれてならぬ。

一葉君は生計のことを餘まり氣に爲なかつた人だといふことだ。必竟は母君が存生であられたので一葉君の方は何と云つても幾らか間接に生計問題に觸れることになつて居たのと、一葉君自身詩人肌なところがあつたので生計問題から全く離れて生き得られたのとの、この二つに基づくことなのであらう。普通の娘さんに比らべると、自由な生活を爲得られたやうだ。寢る時間、起きる時間などは隨分不規則であつたと聞いて居る。身體はさう强くは無かつたのではあるし、母君あり令妹があつたので、盛所仕事などは爲ずとも濟んだから、自然左樣なつたのであらう。母君も令妹も一葉君に名を成さしむるには、隨分さまゞ〳〵な犧牲を拂はれたことであらうと思はれるのだが、令妹の陽氣な性質は一葉君をして家事に屈托せしめ無かつた効はあつたらうかと推測せられる。一葉君の知名の作家になり得た原因――寧ろ便宜――の一つとして家

族の後援といふことを擧ぐるに足る事實は必らず多からうと思はれる。

一葉君は自身の服裝などには無頓着であつたやうだ。他人の服裝などを評する場合には、趣味も鑑識も無い人では無いことは明かに表はれたのであるが、自分自身の服裝は何うでも構はぬといふ風であつた。これは、服裝などには構つて居られぬといふ境遇にあつたからだとのみは强ち極められぬことのやうだ。さればと云つて、別に粗服を誇るといふのでも無かつたやうだ。服裝に構はぬ種類の男の心持と大抵同じやうなものであつたらう。

話の受け答への快い人であつた。從つて前に云つた通り確に話上手の部に入るべき人であつた。話好きと先づ云へる人であつたらう。此頃の令妹邦子君は左樣いふ點で姉君其儘の所がある。顏付と表情に氣味の惡るい程好く似た所がある。

《三》

一葉君が住んで居た下谷龍泉寺町――大音寺前――の家は三百六十八番地であつたさうだ。彼の邊も大分變つたらうから、今私の記憶をたどつて書いて見た所が役に立つか何うか分ら無いが、當時京一の非常門の少し手前から先きは、路がお齒ぐろ溝に沿

つて居て、左側には家がホンのチラホラしきや無かつた。何だか葭籠園ひのやうな小屋もあり、駒寄せみたやうなものゝある空地もあつたやうに思ふのだが、一葉君の家はお歯ぐろ溝手前の角まで行か無いうちの左側で、角から四辻の交番の方へ一町とは寄ら無い所であつたやうだ。一葉君の書齋とでも云ひさうな所は、奥の三畳位な所で、その西が中庭のやうな空地になつて居たやうであつた。商賣は荒物と駄菓子を賣る重に子供相手のものであつた。令妹は客扱ひの片手に廓内の針仕事を引受けた。商品の買ひ出しには一葉君自身で出た。多町へ初めて行つた時の話は、一葉君自身の口から聞いた所では『何處でも姉さんと呼びかけられる。自分は妹より外の人から姉さんと呼ばれたことは滅多に無いのだから、何だか他の人のことでは無いかと、ともすれば四邊が顧みられた』『羽織を着て行くと、人が不思議さうに見ていかぬので、次ぎからは、羽織を着ずに、商品の箱を背負ふやうに爲た』といふのであつた。一葉君は又斯ういふ話もした、『年の暮に、店に小兒が集まつて話を爲て居る。お正月になつて二十錢か三十錢あると金儲が出來るがなアと云つて居る。何うするのだと聞くと、お寶を賣りに行くのだといふ。それで、賣りに行く先きはと云ふと、俺等は柳橋だとか、

俺等は公園だとか、俺等は數寄屋町だとか、皆それ〴〵盛り場に眼を着けて居るのであつた』『或日、店の前へ乞食が立つた。店で遊んで居た小兒が「出無いよ」といふと、「イヤ俺は買物に來たんだ」と云つて、懐中から穴錢か何かを出して塵紙を買つて行つた。大音寺前を去つてから一年程經つて、中島家の歌會の時、貴婦人の中にまじつて歌を讀んで居ながら、フト乞食に物を賣つて有り難うございますと云つたこともあつたと憶ひ出して、妙な心持がした』それから又『何處の人だか知らぬ男が來て、紙入れと袴とを翌朝まで預つて呉れと云ひ「行く先は何うせ貴方がたの前では申し憎い例の土地ですが、これも世間で、爲方がありません、まア笑はずに置てください」などと言ひ譯をして出て行つたこともある』といふ話も聞いたが、この話を事實として考へると、一葉君が半井氏の門に入つたのは二十四年の春であるし、二十五年の秋と二十五年の春とには一葉君の『うもれ木』と『曉月夜』とが雜誌『都の花』に出て居たので、一部の人々の間には一葉君の名は知られて居たらうから、その客の方では一葉君の家と知つて、所持品を預かつて貰らつたのかも知れ無いのだ。以上の話は皆福山町の家で聞いたものなのだが、私が一葉君に初めて會つたのは『日記』にある通り二

十七年の二月十二日、何でも雨の上り切らぬ日であつた、西の戸が引てあつたやうに思ふ。一葉君は『殿方がお野掛でお出掛け遊ばすのは、嘸ぞご愉快でございましようねえ』と云つたやうな調子で話を初めたが、やがて『師匠の所では、樋口の荒物病だと皆さんが仰つしやるんでございますが、妙な病氣も有つたものではございませんか』と皮肉な顔付で一葉君は云はれた。

一葉君が大音寺前を引拂はれたのは、小商の煩はしさが厭になつたからで、決して商賣が不振であつたのでは無いさうだ。

一葉君の文名が高くなつた二十八年の暮頃から、一葉君の閲歴に關するさまざまな浮説が世に行はれた。或る友人が、『一葉さんは吉原でおでん屋をやり、おッかさんは何の樓かの遣手であつたといふやうな事を云つてるものがあるさうだが、隨分途法も無い噂では無いか。第一彼のおッかさんが遣手などになれる人かなれ無い人か位は一見しても分ることでは無いか』と、大笑を爲ながら、私に話したことがある。一葉君の大音寺前の生活は『日記』にある通りである。人の噂などゝいふものは何時でも先づ斯樣なものなのだ。

一葉君の丸山福山町の家は四番地にあつた――家は一昨年の八月十日頃に東の高い蛙が崩れた爲に破れて了まつたが――柳町の停留所から少し北へ寄つた右側に小さい洋館建の銀行があるのだが、その角を右へ曲つて行くと、正面に――大溝を隔てて――神道の何とか會本部といふ看板の出て居る家があり、その家の北並びにある橋を渡つて路次の突當りにあつたのが一葉君終焉の家であつた。『日記』にもある通り、元は守喜といふ鰻屋――母家は今神道本部になつて居る家かと思ふのだが――の離家であつたといふのだ。入口には赤、青、紫といふやうな色硝子で半分ほどから上を張つた戸があり、その左の方に臺所が突き出して居り――これは後で付けたものらしい――三尺四方あるか何うだかと思はれた位の狹い土間から見通しに奥まで壁に附いて長い板の間が通つて居り、その右に六疊が二間その板の間に沿ふて續いて居た、臺所に續いて壁の後の方に隠れたやうな四疊半位の小さい間があつた。六疊二間の南は下から二尺位の所をずッと通して敷居があつた、その下には開閉の出來るやうに小さい戸が嵌まつて居た。『そゞろごと』の『月の夜』に『手すりめきたる處』とあるのがそれなのだ。その手すりめいた處の直ぐ下に三坪位はあつたらうかと思はれた池が、東の

高い崖から滲み出して來る清水を湛へて居た。その池には可なり大きい鯉が飼つてあつた。或日手摺めいた處に肱を掛けて、鯉の游いで居るのを見て居ると、一葉君が皮肉な笑顔で『天上しそくなつた鯉が居るのですが』と云つた。『何かの諷刺ですか、據いぢやアいけませんよ』と云ふと『イヤ、眞實だ。四五日前邦が庭を歩るいて居ると、大きい眞鯉が泥だらけになつて轉がつて居る。水へ入れてやると、池から跳ね出してまだ間が無かつたと見えて、平氣で游ぎ出した。今に、その天上しそくなつた鯉が出て來ると指して見せる』と云ふのであつたが、鯉はたうとう出て來無かつた。

一葉君の家の池水は小さい溝を流れて、出口の家卽ち今神道の何とか會本部になつて居る家の庭に入つて、一葉君の家のに劣らぬ位の大きさの池を作り、又一葉君の家の北は、直ぐ土臺の下から隣の家の池になつて居た。

『そゞろごと』のなかの『雨の夜』にある芭蕉は一葉君の家の池の向ふにあつた。

柳町、指ケ谷町から白山下へ掛けて水田であつたことは私どもの記憶に未だ明かなことであるが、一葉君が福山町へ越した時分はその水田の埋められてからさう年數の經たぬうちであつて、未だ彼の界隈に新開の空氣が十分に殘つて居た。その時分には

――今でも或は左樣かも知れぬが――新開の土地には必らず出來る一種の商賣屋があつた。さういふ商賣屋は新開の開拓者の形であつた。福山町近邊もその慣例に漏れ無かつた。

入り口は土間で、眞中に白金巾を掛けた丸い卓子があつて、その上には安陶器の花瓶に花が活けてあり、壁には棚があつて洋酒らしい壜が幾つも古ぼけた銘紙を晒らして居るといふやうな家が、裏通りになる所には多く、殊に一葉君の家の近邊が左樣いふ商賣屋の中心であつたやうだ。今喜樂館といふ活動小屋の角を曲がつた所などは、その當時は拔裏と云つて宜い程の狹さであつたが、その邊から一葉君の家の前までは右側は殆ど門並さういふ家であつて、人の足音さへすれば、ヘンに聲作りをした若い女の『寄つてらしやいよ』といふ聲が家の裡から聞えた。

一葉君の家へ行く路次の向つて左側の家には御待合といふ招牌が出て居たが、右側卽ち今神道の某會本部になつて居る平家は、彼邊での一等大きいそれ屋であつたやうだ。一葉君は越してから間も無く、賴まれてその家の招牌に『御料理仕出し云々』と千陰流の筆を揮つた。『にごりえ』の菊の井は其の家を材料に取つたものであらう。其

の家に居た女で一葉君の所へ客筋へ出す手紙を書いて貰ひに來たものがあつた、其の女は其の後數寄屋町の藝者になつてからも、わざ〳〵一葉君の所へ文を書いて貰ひに來た。これは一葉君から直接聞いた話であるのだが、二十八年の夏頃一葉君は面白い女があるので『放れ駒』といふのを書いて見やうかと思ふと云つて居た。一葉君が面白い女と云つたのは文を賴みに來た女では無かつたらうか、又『放れ駒』が『にごりえ』と變はつたのでは無からうか。それは右も左、『にごりえ』の中の源七の佗住居の材料が何處から得られたかは、『よもぎふにつ記』二十五年十二月二十八日の條下を讀めば明らかである。蟬表の內職は一葉君姉妹の實地にやつたことなのだ。一葉君から『白山寄りの方に、有名な儒者の孫が此邊同樣の店を出して居る、その家には祖父の學者の書いた見事な額があるので、わざ〳〵それを見に入る客がある』といふ話を聞いたことがある。お力の身の上話のなかにこの話に少し緣のあるらしい所がある。結城朝之助のモデルは誰だか『日記』を讀めば思ひ當る所があらう。

斯う書いて來ると、一葉君の他の作の根據に就いても何か書かなければならぬやうに思はれるので、左に私の知つて居るだけを記して置く。

（四）

一葉君の初期卽ち二十四五年頃の作物では人物も材料も概して純想像裡のものであつたやうだが、一葉君の筆が熟するに從がつて、人物も材料も大抵は一葉君自身の目擊したものに限られるやうになつた。其所に又一葉君の藝術的良心が認められる。

『うもれ木』のなかの陶器のことは一葉君が陶器畵工である兄君虎之助氏から聞いたのであらう。兄君は高輪近傍に住まれたことがある。『雪の日』の根據は『日記』にある通りであらう。『花ごもり』『闇夜』の二篇には一葉君自身に對する或る感情が想像を刺戟した痕が少く無いやうに思はれる。『大つごもり』の女中は實在の人物では無からうが、山村家を組上げる材料は一葉君の知人の家から十分得られたさうだ。

『ゆく雲』は一葉君の親戚にあつた事實を材料にしたもので、寺は法泉寺だといふことだ。『われから』は一葉君の知人某夫人のことを根據にしたものであらう。併し事實通りで無いことは云ふまでもあるまい。

二十八年の秋かと思はれるのだが、一葉君の北隣りに越して來た一家に若い狂女が

あつた。時々一葉君の家の土間へ入つて來て、坐わつて了まつて何うしても動か無い。英語を挾んで取り留まらぬことを高聲でしやべつた。娘の母親が『お前が左樣な風だと、兩親の耻になるのだから』と諭すと、娘は奮然として『イ、エ、私は貴方がたに耻をかゝせやうと思つて斯うするのです』と叫んだといふのだが、『うつせみ』の材料はそれから得たのであらう。

『たけくらべ』の人物は大抵實在のものであつたさうだ。大音寺前の商賣が子供相手のものであつたので、さまゞゝな子供を觀る機會に屢接することが出來たのであらう。『田中の正太のモデルは美くしい少年であつた、祭の時の姿は見せたかつた』と一葉君自身云つて居た。

『わかれ道』のお京は實在の人では無かつたが、傘屋の吉三は當時彼の邊で誰の眼にも付いた程特異な小僧であつたさうだ。

書簡文範のなかにさへ事實を使つたあとが少く無いやうに思はれる。それはともあれ、一葉君は手紙の文の旨い人であつた。隨分言葉の行屆いた手紙をよこす人であつた。思ふに、文を作ることの手に入つた人であつたので、長い手紙を書くことがそれ

ほど苦勞で無かつたのではあるまいか。

《五》

一葉全集の校正は全く私の責任に歸するのだから、こゝに一言して置くが、『日記』には私の手では少しも省略した所は無い。多分全體を通じて何處にも省略した所はあるまい。私どもは人間に思ひ違ひといふことの無いものとは思つて居無いので、『日記』に書いてあることが盡く客觀的に事實だとは見無いのだ。或る人若くは事件を一葉君の書いた通り其儘に受け取るのは餘程閑氣な人々だと思ふので、別に省略もし無ければ、說明も加へ無い。そればかりでは無い、第一何處を省略しやうかといふことになると殆ど際限が無いのだ。

私どもは生地のまゝで人の前に立つことの出來るやうに成るべく爲度いと思つて居ながら、左樣いふ勇氣を欠くことが屢なのだ。一葉君の『日記』には一葉君の美所も欠點も共に明に表はれて居るやうに思はれる。これは私だけのことかは知らぬが、『日記』を最初に讀んだ時には少し意外の感もあつたけれども、少し考へて見ると、『日記』全體を通じて一葉君其人が如何にも好く表はれて居ることに氣が付かざるを得無い。一

葉君なら成る程斯う考へた筈だ、一葉君なら成る程斯ういふ事をやつた筈だと思ひ當ることが屢である。私どもは『日記』を一葉君が生地のまゝで人の前に立つたものと考へざるを得無い。併し、一葉君は『日記』を燒けと遺言したといふのだ。その『日記』を公にする私どもは、人の墓を暴いて死屍を群集の面前に曝すのと同じやうな殘酷なことを爲て居るのではあるまいか。或はさうかも知れ無い、イヤまだそれよりも酷なことに當るかも知れ無い。

けれども、私どもは、一葉君を優れた婦人であつたと信じて居る。私どもは『日記』を一葉君の書き物のうちの最も重んずべきものゝ一と考へる。私どもは、優れたる婦人樋口一葉君の人物を最も明に說明すると同時に、一葉君の作物のうちで最も勝れたものゝ一である『日記』を唯其儘に闇に葬つて置くのは如何にも殘念で堪まら無い。

故人を辱かしめてはといふ考と、故人を本當に世に紹介し度いといふ考とは、樋口家の人々は元より私どもの胸の裡に常に相戰つて居たものであつたが、いろ〳〵相談もして見た結果、生きて居る我々の考が勝を制して、今茲に『日記』を公にするに至つ

たのだ。『故人の意に反して』といふ非難は辭しやうが無いが、左樣いふ非難を加へらるゝ人々に對しては、我々が故人に向つて持つ敬意を聊かは考量せられんことを請ふて置く。

因にいふ、一葉君は『日記』を文章の稽古、習字の稽古の積りで書いたのださうだ、書き放したまゝでロクに讀み返しも爲無かつたものらしい。今日殘つて居るものはその全部では無く、一葉君自身で、鼻紙にしたり、反古にしたりした部分が大分あるといふ話だ。原文は實に旨い字だ。殊に大急きで書いた部分が實に見事だ。

『日記』幷に後篇に新に加へた小說及び隨筆は幸田露伴君の監督の下に淨書に附せられ、それを原稿として印刷に付したのではあるが、校正者たる私の手許でその原稿のなかを改めたことが少く無い。先づ第一に振假名を非常に多く改めた。それが爲に所所假名違ひを生じた位なのだ。これは全く私の罪だ。第二には、二十七年の或部分より以下は淨書の方法に大變化があつた。それより以前の分は、原文の通りに寫してあつたやうだか、二十七年の或部分以下は、假名を字に改めてあるばかりで無く、捨假名の工合など全然改められて居た。これは前後の統一上面白からぬことだと思つ

で、樋口家から原文を借りて來て一々原文通りに改めた。小説及び隨筆の方も、やうな譯であつた。私の考では、『日記』も小説斷片も隨筆も、字を當てたり捨假名を改めやうとすると、さまゞな面倒な問題が生じて來て、容易にかたが付かぬからうと思つたからなのだ。のみならず、捨假名は當時の慣例もあつたのであるから、これだけは濫りに改め度く無かつたのだ。誤字と本文の假名遣ひとは原文のまゝに大抵してある。第三には、『日記』も小説斷片も隨筆も原文には句讀は無かつた、これを切つたのは私のさかしらだ。

一葉全集は幸田君の校訂として世に傳はつて居るか知らぬが、原稿は幸田君の眼の通つたものとしても――幸田君も餘まり綿密に見られたもので無いことは明だが――今云ふ通り私の手で原稿を散々に改め、或部分などは元の原稿を全部改訂して原文の通りに戻した位であるのだから、若し其間に過ちが出來たとすれば――十分有り兼ねぬと思ふ――罪は全く私にあつて、幸田君の毫も與り知られぬことなのだ。責を明にする爲に先づこれを記して置く。

在來の一葉全集『にごりえ』以下二十四篇は故齋藤緑雨の校訂になつたもので、誠

に見事な校訂であるので、私は元のまゝで殆ど改め無い。文字及び振假名に少々云ひ分が無いでも無いが、さういふ誤りには所由があるかも知れぬと思ふので、大抵は其儘にして置いた。後篇卷頭の一葉小傳と云つたやうなものは、元緑雨の筆に成つたものを、必要上二三字改めたのみだ。

書簡文範には誤植と思はれる所が少々あつたので、これは出來るだけ改めた。尙その上に、文章の手本として學ばれる人が或はあるかも知れぬと思つたので、書簡文範に限り、本文中の假名遣ひを眼に着くに隨つて改めて置いた。

校正に掛つてから今まで七ヶ月ほどになる。私は出來るだけ注意した積りではあるが、まだ手落ちが大分あるやうなのを甚だ殘念に思ふ。

終に臨んで、故人の最も尊敬して居た先輩であつたといふ緣故に因り、我々の懇請を諾せられ、さまゞな御配慮と助言とを賜はつた幸田露伴君、樋口家に取つて甚だ有利な條件に於て此一葉全集の出版を引受けられた博文館主大橋新太郎君、諸種の點に於て同情を賜はつた大橋時子君、『日記』の公刊に至るまでに種々好意を辱うした森鷗外君及び戸川秋骨、島崎藤村の兩君、原文の淨寫に盡力せられた諸君、私の校正を

助け給はつた人、私の我儘な注文に快く應じ給はつた博文館出版部幷に同印刷所の諸君に、樋口家に代り、且又私自身からも、謹んで茲に謝意を表すると同時に、樋口家に對しては、故一葉君の重なる作物が故人の名に相應した此全集に纏まつたことに就て、慶意を表する。

明治四十五年四月廿四日夜

馬場孤蝶

明治四十五年六月　日印刷
明治四十五年六月　日發行

一葉全集後編
定價金壹圓貳拾錢

著者　樋口一葉

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市下谷區二長町一番地　河合辰太郎

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館
振替貯金口座東京二四〇番
電話番號浅草二六二〇番

名家小說文庫

本文庫は著者が最近の文壇に盛名を馳せたる代表的傑作のみを收載す

本文庫は內容の美紙質の精裝釘の麗と相俟つて最近の出版界に美しき色彩を添ふ

菊判洋布特製函入
紙質精良印刷鮮明
紙數各冊千頁以上
正價各冊金貳圓
小包料各金拾六錢

第一編 第二編 露伴叢書 前編 後編 全二冊

前編 目次

二日物語○夜の雪○僊俸○綠の絲○休暇傳○朱昏○ひげ男○新博士○迷霧○和合樂○川舟○大珍話○綠外綠○夢がたり○是ぱ〳〵○醉興記○珍饌會○獅子庵○伊能忠敬○まき筆日記○客舍雜筆○地獄溪日記○將棄雜考○元祿時代の雜劇○折々草

後編 目次

椀久物語○春の山○當世外道の面○封じ文○三段○自縛○師鐵○冷干氷○箱根草○銃獵孝行○夢日記○ひとよ草○新浦島○郷成功○日蓮上人○二宮尊德○突貫紀行○醉郷記○易心後語○春の一日○うつしゑ日記○遊行雜記○旅の心得○知々夫紀行○文明の庫

第七編 水蔭叢書 全一冊

目次

女房殺し○新潮來曲○旅役者○林間の高塔○湖心の暫○紫海苔○地底の人○崖下の家○髭○水樓記○別莊守○紙子くらべ○つぎ紙子○石地藏○濁流○海上の饑渴○道惡○花井お梅

第八編 小波叢書 全一冊

目次（あゝ京都○男の心○血○かつら川○軍國女氣質

既刊內容

第三編 澁柿叢書 全一冊

目次

鉉蕉○婆の心○猿冠者○鐵火○聚樂殿○島勘左衛門○武士○柄○新粧法○夢と夢○眞井正雪○親の面○五月女阪○三千石○男の面○大石內藏之助○碧玉盃○大風乾之介○他流試合○脫走兵○振歩軍○密告○此の戀

第四編 第五編 柳浪叢書 前編 後編 全二冊

前編 目次

おもかげ橋○昇降場○骨ぬすみ○妾○今戸心中○隅田の夜路○罪の悶○變目傳○都の夢○狂言娘○畜生腹○重づま○貯金玉○花ぐるひ○幼時

後編 目次

非國民○名物松原饅頭○歌加留多○黑蝎蛭○兄の煩悶○七騎落○紫被布○二人やもめ○女夫心中○八幡の狂女○親ごゝろ○そまる絲○座敷牢○中川心中○淺瀨の波

第六編 花袋叢書 全一冊

目次

夕張少女○女教師○鳥の心中○老夫婦○蜜の家○春の別墅○齒家の日記○令妹○泡花節の名手○寫生の花○一家の要○切戀の人○無學○不盧の出來事○二人○山小屋○憶梅記○思ふどち山深谷○老僧○小桃源○みやま鶯○悲劇○孤島

第九編 秋聲叢書 全一冊

目次

氣まぐれもの○惡物○ひとり樓○濁らぬ水○みちゝ芝○春の月○みだれ心○里の女○藪かうじ○お靜○見えぬ坊○老骨○思ひぬ罪○通譯官○古巢○學士の燃○狂學士○一念○宵像○蒲い花園○觀海寺の五日○危機

第十編 鏡花叢書 全一冊

目次

外科室○海城發電○化銀杏○慈善會○鷺花溪○桑物語○外國軍事通信員○勝手口○月夜遊女○少年行○脚本深沙大王○やどり木○鬼の灯○そら解○星女郎○紫手綱○靈桑○頰白

第十一編 美妙叢書 全一冊

目次

阿千代○鰻且那○峰の殘月○後の殘月○元若白髮○古根○いのり首○しゝみうり○惡勝の善○孫右衛門○馬丁仙吉○迷乎悟乎○鐵千○悔○琴○若葉○露○帝國海軍○決闘○死刑囚の○勢至丸○太郎定綱○二郎經高○たかせ川○性空上人○大博士○破壞主義

博文館發行

●博文館發行諸名家

●紅葉全集	故尾崎紅葉君著	全六冊	正價各壹圓八拾錢	小包料拾六錢
●眉山全集	故川上眉山君著	全四冊	正價各壹圓八拾錢	小包料拾六錢
●獨歩全集	故國木田獨歩君著	全二冊	正價各金 貳 圓	小包各拾六錢
●櫻癡全集	故福地櫻癡君著	全三冊	正價各壹圓貳拾錢	小包各拾貳錢
●小說十二人集	秋聲外十一君作	全一冊	正價金八拾五錢	郵稅金八錢
●北米の花	田村松魚君著	全一冊	正價金壹圓拾錢	郵稅金八錢
●小說藤村集	島崎藤村君著	全一冊	正價金七拾五錢	郵稅金八錢
●小說食後	島崎藤村君著	全一冊	正價金八拾錢	郵稅金八錢
●近作十五篇	田山花袋君著	全一冊	正價金七拾五錢	郵稅金八錢
●寫生旅行魔宮殿見聞記	吉田博君著	全一冊	正價金九拾錢	郵稅金八錢
●あめりか物語	永井荷風君著	全一冊	正價金六拾五錢	郵稅金八錢
●閨秀小說十二篇	岡田八千代君編	全一冊	正價金四拾五錢	郵稅金八錢
●換菓篇	鏡花外十四君作	全一冊	正價金六拾錢	郵稅金八錢
●酒道樂	村井弦齋君著	全二冊	正價各金五拾五錢	郵稅金八錢

●小說書類拔萃目錄

●冒險小說大蠻勇	江見水蔭君著	全一冊	正價金五拾錢	郵稅金八錢
●實地探檢捕鯨船	江見水蔭君著	全一冊	正價金參拾五錢	郵稅金六錢
●地底探檢記	江見水蔭君著	全一冊	正價金四拾錢	郵稅金八錢
●短篇十種モウパッサン集	前田晁君譯	全一冊	正價金四拾五錢	郵稅金六錢
●最近外交祕密	千葉紫草君纂譯	全一冊	正價金參拾錢	郵稅四錢
●小公子	故若松賤子君譯	全一冊	正價金參拾五錢	郵稅八錢
●十五少年	故森田思軒君譯	全一冊	正價金參拾五錢	郵稅金八錢
●ロビンソン絕島漂流記	高橋光威君譯	全一冊	正價金四拾錢	郵稅金八錢
●立志小說黃金村	司馬亨太郎君著	全一冊	正價金四拾八錢	郵稅金八錢
●家庭小說ひとりぼっち	河井道子 辻村靖子 兩君共譯	全一冊	正價金六拾五錢	郵稅金八錢
●家庭小說小姬君	前田雪子女史抄譯	全一冊	正價金四拾五錢	郵稅金六錢
●家庭小說樂天小屋	松居松葉君譯	全一冊	正價金四拾錢	郵稅金四錢
●短篇六種ゴーリキー集	相馬御風君譯	全一冊	正價金四十五錢	郵稅金六錢
●短篇三種ツルゲーネフ集	吉江孤雁君譯	全一冊	正價金四十八錢	郵稅金八錢

博文館發行

文藝書類拔萃目錄

文學士　大町桂月君著

◎美文韻文 **黃菊白菊**　全一冊袖珍上製　紙數四百二頁　正價金貳拾五錢　郵稅金六錢

桂月先生の文は巒貌を動かすこと久し悲概の聲を發しては秋風の老松に漑するが如く哀痛の音を吐きては狐猿の幽澗に叫ぶが如く句々血を吐き字々玉を綴る麗にして沈痛優にして豪宕是れを一讀すれば人の思を清くし感情を純潔ならしむ。

鹽井、大町、武島三文學士共著

◎散文韻文 **花紅葉**　全一冊袖珍上製　紙數四百廿二頁　正價金參拾錢　郵稅金六錢

天に春花秋葉の文あり人間又美文辭なかるべけんや文名江湖に傳ふ三文學士が其錦心繡觴を吐いたるもの卽ち此冊子となる世の花を憐み月を樂しむの志必ず本書なかるべからず。

故大和田建樹君著

◎散文韻文 **雪月花**　全一冊袖珍上製　紙數六百廿六頁　正價金參拾五錢　郵稅金六錢

其文は清楚婉麗趣味掬すべく其歌は優雅流滑奇想天外より來りて句々風を生じ言々花を降らすものは故大和田建樹先生の筆となす。此編收むるところ小品無慮二百篇、落寞振はざる今日の文學界中の旗鼓たるものは此書を措きて又何かある。

故大和田建樹君著

◎美文韻文 **野菊**　全一冊袖珍上製　紙數四百九十頁　正價金四拾五錢　郵稅金六錢

同じく大和田先生の勞作也。漫筆の清楚輕快なる、紀行の畫趣詩味多く、歌編の嘲嘲燦爛たる、特色集めて此冊子にあり、壺中の天地眞に作文の模範たるべし。徒然の友たるべし。

故大和田建樹君著

◎散文韻文 **深山櫻**　全一冊袖珍上製　紙數四百二頁　正價金四拾錢　郵稅金六錢

○初寢旅○初日影○短歌十二首○雪の降るさま○奉公の身○烟草○神樂乙女○春日山○三笠山○宮まうで○豐島が岡○謡曲○なし○水の歌○雪の日○何もの、光ぞ○合羽坂○短歌四首○出入の車夫○卷すし○納豆賣○三月三日○外數百項

與謝野寛君作

◎**うもれ木**　全一冊袖珍上製　紙數一六八頁　正價金貳拾五錢　郵稅金六錢

本書收むる處短歌六篇、長詩十三篇、小說三篇美文二篇、著者が奇拔の才到る處に可ならざるはなし、著者年少にして氣を負ひ逆境に處して志を立つ、本書は又側面より見たる著者半生の理想閱歷也。

文學士　土井晚翠君著

◎**天地有情**　全一冊袖珍上製　紙數二百三十頁　正價金貳拾五錢　郵稅金四錢

峨々の山洋々の水以て君の詩を評すべし此編君が今日迄の吟峨を錄したるもの新體詩中別に一旗幟を樹立する者詞華爛漫誠に明治詩壇の新光輝たり

佐々木信綱君、印東昌綱君　合著

◎美文韻文 **磯馴松**　全一冊袖珍上製　紙數四百十二頁　正價金貳拾八錢　郵稅金六錢

○歌文○わかれ○州○思ひあやまりて○わかれ○歌屑○はなれ小島○夕べ憂に○池○名もなき小川○その折々○寒きちまた○幸なき花○雪の日○緣日○房總漫吟○臥龍梅○さびしき夕べ○逍遙○秋のみちのく○ふな着き○春のみちのく○乘合馬車○根本の夕べ○信越遊草○少女ごゝろ○かへり道○暖籠口○虎十首○明日のわかれ○交通遮斷○老車夫○刀根川ぞひ外數十項

文學士　鹽井雨江君著

◎美文韻文 **暗香疎影**　全一冊袖珍上製　紙數二五四頁　正價金貳拾五錢　郵稅金六錢

○歸鄕の記○狂女○病床の吟○夜半の梟○草籠○小田の里の一日○山人の妻○深山の美人○道灌山の蟲○瀧の川の紅葉○山莊獨興○元旦卽興○寒山樵歌○つま琴○破れ琴○戀ひの山人○戀ひを○初春の聲○我が國家○天長節の日に○松と菫○親友を哭す○別後の敬へ子に與ふ○大和撫子○小夜時雨等

永井荷風君著

◎あめりか物語

全一冊四六判美本
紙數三百九十頁
正價金六十五錢
郵税金六錢

○船室夜話○野路のかへり○岡の上○醉美人○長髪○春と秋○雪のやどり○林間○惡友○怨恨○寢覺め○夜の女○一月一日○曉○市俄古の一日○夏の海○夜半の酒場○落葉○支那街の記○夜あるき○八月の夜の夢○附錄○フランスより○船と車○ローン河のほとり○秋の巷

故齋藤綠雨君著

◎みだれ箱

全一冊袖珍上製
紙數三九八頁
正價金二十八錢
郵税金六錢

○朝寢髪……（小説）○青眼白頭……（隨筆）
○わたし舟……（小説）○長者短者……（隨筆）
○日用帳……（隨筆）○半文錢……（隨筆）
○ふところ談義（隨筆）

故齋藤綠雨君著

◎あられ酒

全一冊袖珍上製
紙數四六五頁
正價金弐拾五錢
郵税金六錢

觀想精致文章研練而して一種警拔の妙を有するもの是れ故綠雨の文にはあらずや本書は彼れが得意の小説及び隨筆を載集したるもの社會百般の現象は悉く捉へ來つて言々句々人の肺腑を刺し嬉笑怒罵筆に隨て紙面に飛躍す請ふ一讀して此言の妄ならざるを諒せられよ

田山花袋君著

◎花袋文話

全一冊洋裝四六判
紙數四百四十頁
正價金八拾錢
郵税金六錢

○描寫論○明治の作品研究○卓上語○文章より見たる現代の小説○現代の小説○山水小論○現代の紀行文○[illegible]小説の新潮○フロオベルとゾラ○[illegible]方文記○ゾスドオデエ○太平記と[illegible]○現はれたる源平盛衰○『浦のしほ貝』に見出したる「自然」

74
56

74
56ت